

# したたり落ちる楽園

text by Shinji Ishii  
文いしいしんじ

一家で通いつづけた京都のとある名店が、先週そつと、ひそやかに看板をおろした。

ひとひがうまれて半年ほど経った、2011年の春、知り合いの建築デザイナー・松井薫さんと、河原町二条で待ち合わせ、中華料理を食べた。妙に暑い日だった。店を出、ベビーカーを押しながら汗をぬぐう僕に、松井さんが京都っぽい笑みを投げかけながら、

「すぐそばに、僕が内装でかけた店ができたら、いつてみましょうか」

それがHiiifikaフェ。昭和中期の京町家を改築し、豊敷きの喫茶店とした。店主の吉川さんはおだやかな物腰の青年で、けれども店内には、ワールドミュージックを中心にレコードが四千枚、隙間なく置かれた本棚には、旅と音楽にまつわる万卷の書が詰まっている。



してくれる。吉川さんの話をきいていると、誰だつて自分でもコーヒーを淹れたくなってしまう。僕も家の水屋箆筒をひっくり返し道具を探して一週間に三度は自分で淹れるようになった。けれどもこの世でいちばんほっとするのは、吉川さんの前で、吉川さんの淹れてくれたコーヒーを口にくぐむときだ。

キューバ、コロンビア、ブラジル。楽園の豆、パラダイスの音楽。レコードも豆も、遠く海をこえて、極東のこの小さな島国にやってきた。夏は蒸し暑く、冬は凍てつく、楽園とはほど遠い国。けれども旅路の果てに待っていてくれたのは、おだやかな眼差しで、豆と音楽をこの上なくいいねいに扱う、繊細な指の青年だった。僕が豆だったなら、吉川さんの手で粉々に砕かれ、その上からちょうどいいぬるさ（甘味を最大限に引きだすため、吉川さんが見つけた温度）のお湯を、まあるく注ぎかけてもらう。それこそが楽園、したたり落ちるパラダイスにちがいない。

店じまいの三日前、園子さん、ひとひと三人でかけた。ひさしぶりのひとひの全身を見わたし、吉川さんは「うわあ、でか

ところで我が家にはエアコンがない。二階建て、6DKの京町家に三人暮らし、扇風機二台でしのいでいる。が、2011年の夏は半端ない酷暑だった。0歳児のひとひは肌が強くなく、汗疹など心配で、どこか暑さをしのげる場所はないか、と、奥さんの園子さんと相談している最中、ピコーン、と頭のなかで音がして、吉川さんのおだやかな笑みとボサノヴァの音が浮かんだ。

できた当時のHiiifikaフェはまださほど混んでいなかった。というか、失礼を顧みずいえば、いつ行ってもがら空きだった。真夏のあいだ一家三人で、週に四、五日は出かけた。エアコンの爽やかな空気のなかで、ひとひはキャッキヤとはしゃぎ、昼寝し、たぶたぶと豊かに乳をのんだ。ハイハイで移動し、はじめてつかまり立ちをしたのも、はじめて階段をのぼったのもこ

なったなあ」と嘆息した。へへへ、と笑う元・赤ん坊。あれからもう9年が経っている。けれどもがまわりつづけるレコードが奏でる音楽のように、カレンダーや時計でははかれないのが、コーヒーの時間そのものの豊かさだ。

最終日、ひとりで出かけた。吉川さんはケニアの豆をお薦めしてくれた。ていねいに、ていねいに、ここをだめて吉川さんのお湯をそそぐ。そのところが砕かれた豆に伝わり豆たちは笑い、うなづく。カップからひと口すすると、空の青さと暖かな風が、からだの芯を吹き抜けた。Hiiifikaフェでの最後の一杯は、なんとというか、このお店で過ごした時間をまるまる口に含

こだ。父母を除き、どの親戚縁者より、吉川さんは幼少時のひとひの生育をすぐそばで見届けてくれた。「ハイファイ、じやなくて、ハイハイカフェですね」と常連さんによくからかわれもした。

吉川さんのコーヒーが特別だと、通いはじめて間もない頃から気づいた。「豆だ」と、コーヒーをのんではじめておもった。「豆の果汁」「豆ジュースだ」と。それくらい甘く、すばやく口中を滑っていき、そのあとには深い、雲のような快感がのこる。


ジュースの旨み、甘味を搾りだすには、技と根気がある。コーヒーの話をしだすとふだん無口な吉川さんがとまらなくなつた。うんちくというのでなく、コーヒーのある時間、あるいは、コーヒーという時間を、この上なく愛している。だからこそ、感覚的なとえや表現に走るのではなく、科学的に、論理だてて、コーヒーの味を説明

んだ感じがした。まるで、楽しすぎる旅の、最終日のようだった。

閉店後もひとひとお店に顔を出した。段ボール箱のすきまから吉川さんはいつもの穏やかな笑みをみせてくれた。箱のなかにはコーヒー道具、本とレコード。Hiiifikaフェがまるまる詰めこまれている。落ちついた自家焙煎した豆の通販をはじめるといふ。一軒目は看板をおろしたけれども、いつかまちがひなく二軒目がひらく。その時まで家でレコードをまわしつつ、吉川さんの豆を道連れに、ささやかなコーヒーの旅をつづけようとおもう。



**ケニア共和国**



面積: 58.3万km<sup>2</sup> (日本の約1.5倍)  
 人口: 4970万人 (2017年: 国連)  
 人口密度: 85.68人/km<sup>2</sup>  
 民族: キクユ族、ルヒヤ族、カレンジン族、ルオ族、カンバ族など  
 言語: スワヒリ語、英語  
 宗教: 伝統宗教、キリスト教、イスラム教



**Profile**  
 1966年大阪生まれ。京都在住。  
 著書に小説『ぶらんこ乗り』『麦ふみクーツェ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を教え!』(町田康共著)『熊にみえて熊じゃない』『遠い足の話』、絵本に『赤ずきん』(ほしよりこ絵)など多数。